

# 明治30年代における石井十次の救済・教育思想に関する一考察(上)

## ——「無制限收容」の問題を手がかりに——

河原 国男\* 石部 元雄

石井十次(1865-1914、慶応元-大正3)は明治38年岡山孤児院の「無制限收容」を宣言し、翌年には1200名といわれる孤児を收容した。本稿はこうした「無制限收容」を基礎づける思想の特質を解明することを課題とした。方法としては、明治30年代の石井の日誌に着目し、日常感覚との関連においてその基礎づける思想を把握し、また、その思想に対立する契機いかに留意した。その結果、「進撃」の感覚に基づいた「東洋孤児院」という観念が抽出された。その孤児院の特色は、「膨張」主義、「世界の人物」の養成機関、中枢としての院長の絶大な権威、といった諸点にあった。無制限收容を基礎づけたのはこのような孤児院の観念であった。それを通じて石井は、「救済」(=入院)と「教育」という相異なつたいとなみを緊張関係をもって識別することなく「救済教育」として思想的に接合した。こうした思想においては、在院児はある特性をもった「孤児」として十分に考慮されることはなかった。

キーワード：天下無告の孤児 東洋孤児院 無制限收容 救済教育

### 1. 序

本稿(上・下)は明治30年代における石井十次の救済・教育の思想の特質を「無制限收容」の問題を手がかりとして解明しようとするものである<sup>1)</sup>。

石井(1865-1914、慶応元-大正3)<sup>2)</sup>は明治38年に岡山孤児院の「無制限收容」を宣言し、翌年には1200名といわれる孤児を收容した。そのことについて、柴田善守氏は同時代の留岡幸助(1864-1931、元治元-昭和9)と比較して次のように述べられている。

社会福祉というものはその能力の限界のなかで行うものではなく、社会のなかのニーズに応える責任があるという。留岡は全く反対のことばをのこしている。「言ふ勿れ数の多きを、抑も慈善家たるものは幾人幾百人を必ずしも救助せざるべからずとの約束は先天的に有せざるなり。出来能ふだけの力をもって数人若くは数十数百

を救はば之を以て満足す可し。然らば則ち数は敢て関する所にあらず」(傍点筆者〔柴田氏])。「無制限收容」という石井の宣言と「出来能ふ力を以て…満足す可し」という留岡のことばは、石井と留岡の、そして岡山孤児院と家庭学校のちがいを、さらにいえば社会福祉というものの矛盾をしめしているのではないだろうか<sup>3)</sup>。

このように柴田氏は述べ、「無制限收容」という措置をめぐる問題の所在を指摘された<sup>4)</sup>。1200名を收容したともいわれるこの措置が、どのような建築上の施設、スタッフ(「院役者」)、養護活動、教育活動、財政などの諸条件のもとでおこなわれたのか、検討すべき事柄は多い。本稿でとくに検討しようとするのは、この措置を基礎づける石井の思想である。すなわち、收容人員の制限、無制限に関する考え方<sup>5)</sup>を直接問題にするのではなくて、その考え方を可能にさせた、より基礎的な観念のあり方を問題にしてゆきたい。いいかえれば、ある特定の観念が具体的、集約的に表出されたものとして、收容人員の制限、無制限に関する考え

\* 教育学研究科

方を理解してゆくのである。「成程基本金もなければ、約束の寄附金もないのですから、あてがないと云へばあてがないので御座りまして、実に無謀冒険の仕業であります」(明39.12)<sup>6)</sup>とも自覚されたこの措置は、それを必然化する思想的基礎づけをかれの内部に有していたにちがいない。それはどのような思想だったのだろうか。また「無謀」というかれ自身の反省とは別に、その思想には「救済」や「教育」にかかわるいかなる問題が示されていたのだろうか。このような点を追究してゆくことを本稿(上・下)の課題とする。

この課題に対しては、以下のような方法をとりたい。基礎資料としてかれの日誌に着目する<sup>7)</sup>。それは岡山孤児院にかかわる毎日の主だった出来事の記録、それらについての所感、読書感想、事業の反省、計画、さらに信仰上の告白などが記されている。これらの記述の体裁は多くの場合が断片的であって、多数に読まれることを前提として書かれた文章(たとえば、新刊 岡山孤児院<sup>8)</sup>)にくらべると理解しづらい例が少なくない。それゆえ、こうした記述をあつかうに際しては他の類似の例とできるかぎり関連づける必要がある。断片的ではあるが網羅的であるということは、さまざまな角度からの検討を可能にしよう。まず1つは日常生活感覚を示す記述に着目する。それによって、「無制限収容」の措置など孤児院事業を基礎づける思想の主導的といえる一面を見出したい。2つには、「無制限収容」の措置をとくに基礎づけてゆくとと思われる観念——「東洋孤児院」という観念——をできるかぎり構造をそなえたものとして把握する。また、そうした観念に対立する——その1つとしては留岡が示した方向——と思われる知見が石井の思想の内部にどのように形成されているかどうか留意してゆく。検討の対象については、主に明治30年代(1897—1906)<sup>9)</sup>の日誌に着目する。

本稿の以下の順序は、まず「無制限収容」を基礎づける思想として「東洋孤児院」という観念を摘出し、つづいてその観念が明治38年(1905)にいたって問題化してゆくプロセスとそれについての石井の認識に着目する。そして、以上の検討をふまえて「無制限収容」の思想の特質について考察する。

## 2. 1) 「東洋孤児院」という観念 ——「無制限収容」を基礎づける思想—— 進撃せよ進撃せよ、之れ即ち勝利<sup>10)</sup>。

一人二人死んだとて戦争をやめざる如く一人二人逃げたからとて滅ったからとて、決して吾党の戦争をやむるに及ばぬ。…どこまでも新陳代謝してどしどし進撃すべし<sup>11)</sup>  
進撃的活動は勝利の原因なり。進撃に優るの福音はなし<sup>12)</sup>。

このように「進撃」という言葉をかれは断言的な調子で記している。もちろんそれは厳密に定義されてはいないので、多分に曖昧さを帯びている。しかし、次のような特徴はその言葉に見出すことができよう。戦争の用語が示すように拡大するという感覚に基づいている。また、「進撃せざれば退歩する」とあるようにほとんど不可避であるかのような緊急の感覚に基づいている。さらに、「新陳代謝」とか「植物的呼吸運動」<sup>13)</sup>といった語句が使用されるように、ある生命をもったものという感覚にも基づいている<sup>14)</sup>。

生命とはいえ、誰のそれか、何のそれか、その主体については不確定なまま記されていることが多い。しかし明確に限定されている場合、それはいうまでもなく孤児院(事業)を指していた。「進撃的孤児救済法」<sup>15)</sup>という言葉は、その端的な用例である。このような孤児院は石井の意識において次の2種類のあり方を示していた。1つは現実的な、社会的にも認知されている実在する「岡山孤児院」、いま1つはより観念的な、とくに石井の主観において存在する「東洋孤児院」<sup>16)</sup>である。この2つについてもかれは慎重に識別して記述してはいなかった。2つの孤児院はほとんど不即不離なかたちで記述されている場合が少なくないのである。以下においては「東洋孤児院」の観念の方を腑分けしてゆき、その特質を分析してゆこう。

「東洋孤児院」という名称は、明治28年(1895)4月8日の日誌の記述がおそらく初出である。「岡山孤児院を根本的に大阪に移転し『東洋孤児教育院』と改称せば奈何」とあり、その欄外に「東洋孤児院」と記されている。ここに「改称」とあるが、明治30年代における「東洋孤児院」はたんに名称の問題であるよりは特定の観念を示すものとして日誌の上に出現する。さきの「進撃」の感覚がもっとも基礎に位置している。それに規定され

た観念としての「東洋孤児院」の特色は、以下のように見出された。

明治30年(1897)にかれは次のように記している。

専一に社会に代って「孤貧児の教育事業」をやることなら寧ろ大仕掛にやらざる可らず。即ち大阪市に「東洋孤児院」を設立し東洋諸国の孤貧児を集め、之れに昼働夜学の法を以て「実業の普通教育」を施し、丸裸にしても一個独立の人間として社会に立ちうる的人間を養成し、東洋の天地否全世界に向って放散せしめん。あゝ又た一の快事にあらずや<sup>17)</sup>。

ここでは将来の孤児院事業が展望されている。まだ実現してはいない「東洋孤児院」がその事業である。その特色として次のことに注意したい。1つは「大仕掛」ということ。2つに、「一個独立の人間として社会に立ちうる的人間」の養成ということ。そして、こうした事業の発展について確固たる意志をもって展望する位置にある石井のあり方について。これらのことは、より具体的に以下のような展開をみせていた。

i) その特色の1つは「膨張」という言葉で記せられる、事業の拡張化の方策である。「岡山孤児院の膨張 本部一岡山市門田屋敷 支部一日向国高鍋一大阪市〇〇〇熊本一東京一新潟一米国サンフランシスコ一北海道函館一朝鮮国仁川一支那国一南米」<sup>18)</sup>。このような「膨張策」はただちに実行できる措置として示されているのではない。しかしそれをかれは孤児たちのために緊急を要するものとして理解していた。すなわち、次のようにかれは記している。「あゝ『東洋孤児院』生れたり。何故に生れたるか。実に時勢の必要に応じて生れたるなり。…而してわが岡山孤児院はどうしても我国はもとより東洋諸国に散在せる孤児を救済教育せざる可らざるの責任を与えられたるが故なり。若しわが岡山孤児院にして事業を拡張して三万の羊を収容し之れを教育するにあらずんば、彼等は狼の飼とならざる可らざればなり」<sup>19)</sup>。「時勢の必要」に必ずするならば、当然、この事業を拡張せざるをえない、「責任」の所在もこの点にこそ存する。石井はこう信じて疑っていない。

ii) 東洋孤児院の第2の特色は教育についてである。たとえばかれはこう記している。「全心力を

傾注して信仰ある智識ある強壯なる青年を輩出せしめよ。一人の立派なる青年を養成するは則ち一国を救ふ所以なり」<sup>20)</sup>。「岡山孤児院は世界的事業なり。是故に益々教育的機関を整理して世界的人物を輩出せしめざる可らざるなり」<sup>21)</sup>。「二十世紀は戦国時代なり。是故に我等教育家は此の時代に適應するところの戦士の国民を養成せざる可らず」<sup>22)</sup>。石井の期待は要するに社会(日本あるいは世界)において有為な人材が養成、輩出されることである。「才学抜群の青年は岡山中学校或は医学部に入学せしむべし」<sup>23)</sup>という考えも当然出てくる。岡山孤児院に在院していた者が退院後どのような職業についたかについて、石井はむろん知っているはずである。明治32年(1899)の内部資料<sup>24)</sup>によれば、合計263名のうち、活版40、農業26、下女奉公14、女学生13、理髪11、商家10、といった記録がある。そうした資料によつてかれはなにほどこかの「現実」を突きつけられたはずだが、みずからの期待を一方向的に貫ぬき、有為なる人材の養成、輩出という教育のあり方を強調していた。

iii) 東洋孤児院のもう1つの特色は、石井自身の位置づけについてである。「教育上より言ふ時はどうしても理想を実行するの原動力として予は不動王として院内に鎮坐せざる可らざるなり」<sup>25)</sup>。

「不動王」「不動点」あるいは「不動尊」といった言葉をつかつて、かれは孤児院の中枢において權威をもったみずからの立場を理解していった。その際かれに意識されたのは現実の岡山孤児院の院長としての立場であったことも少なくはないだろう。しかし、そうした現実の立場を越えてゆく場合もあった。かれはこう記している。「よし、も一よし、予はこれより不動尊となり、全力を尽して『理想的教育』を施行し天職を全ふせん…活ける天父と活ける主イエスキリストより地上の全權を委ねられたる爾(石井自身を指す——引用者注)は此の東洋の日本に於て爾の天職を果さざる可らざるなり」<sup>26)</sup>。このように「不動尊」としての立場は東洋孤児院の場合にも理解されていた。その立場にあつて石井は、みずからの職務を、「天父」「主」といった宗教上の対象を背後にすることにより、あるいは、それらとの「一致」<sup>27)</sup>によって意義づけている。そしてこうしたかれ自身こそが「理想的教育」の主要な担い手として想定される。多くのスタッフへの期待は、ここではほとんどみられない<sup>28)</sup>。それが示されているとすれば、「不動尊」に

従属してその「教育」を仲介するという役割に限られていた。

以上の特色をもった東洋孤児院は、構想として組織立って観念されることもあった<sup>29)</sup>。この場合もふくめて、この孤児院は石井の主観において東洋へと「進撃」してゆく。その過程は動的である。それゆえの緊張をかれも感ずることもあったであろう。しかしこのような場合でも「快事」として処理されるにちがいない。安定感といっていいそうした感覚は、たしかに東洋孤児院という観念にともなうものだが、また同時に、より現実的な事実についてのかれの認識にももたらされるものであった。すなわち、かれは次のように記していた。

実に愉快なり。頭脳は靈魂居って始めて活動する如く、事業は主任者の中心点に居ることによって始めて敏活に凡ての刺激に應ずることを得るなり<sup>30)</sup>。…

実に天地静肅にして秩序整然。三、かくの如くじっと中心点を定め全体を緊束して進み行くこと半年なれば、院内の境遇全く一変して化石谷となる可し<sup>31)</sup>。

ここで「秩序整然」ということのできる対象は東洋孤児院であるよりはむしろ岡山孤児院である。そしてこの言葉の意味は、施設における具体的な人間関係を通じて、かれには十分に理解しうるものであった。すなわち、かれは次のように記している。

子供は実に正直なるものなり。…予は三百の子女が如何に予の一挙一動によりて或は右し或は左するかを知る。一例を挙げんに、…予は定刻に院内を巡視せるに未だ起出でざる者あるを見たり。而して其の原因を考ふるに全く予より出たるものなるを知れり。予は寄附金募集のための音楽幻燈隊とともに外出して帰るや、昼夜連日の激戦によりていたく疲労するが故に、一二週間は児童等に先ちて起出ること能はず。為めに彼等に後ることあり。此事直ちに一部児童の倣ふ所となり、他の子女亦たに倣ふに至るなり。一事は万事なり<sup>32)</sup>。

岡山孤児院の現実としてかれが認めたことは、この例のようにかならずしも申し分ないものだった

たわけではない。しかしその現実にもかかわらず、そうした例示が明らかにしているのは、一事が万事、三百の子女が自己（石井）の「一挙一動によりて或は右し或は左する」であろうという満々たる自信である。それはまことに「愉快」であるにちがいがなかった。こうした岡山孤児院についての安定した秩序の認識は、東洋孤児院という観念をその根底から確保するものとして注目に値する。

明治38年4月の「岡山孤児院新報」誌上には、「従来孤児数に制限を加へたる方針（在院児三百の内規）を茲に一変し、其数に制限を置かず、力を盡し思を致し、事業の許す限りに於て之を収容せんと欲する」とある。この「無制限収容」の宣言は、はじめに記したように翌年5月に文字通りの実践として展開し、1200名といわれる児童を収容することになる。このような「無制限収容」を思想的に基礎づけていたのが、以上に摘出した「東洋孤児院」という観念に集約される石井の思想なのだった。

## 2. 2) 「東洋孤児院」の問題化とその認識 ——明治38年における「無制限収容」の断面——

「無制限収容」を宣言し、孤児院事業に対する充実感はいちだんと高まっていると思われる明治38年(1905)。この年以降の日誌に、われわれはある見逃しえない記述に曹遇する。それは収容している孤児についての記述である。そのいくつかを以下に列挙しよう。

一、いま少し院児を自由快活に教育すること能はざるや。二、何故に孤児院の子供はかく不愉快にかく不活発に生氣なきか。三、寧ろ茶臼原の如き広漠たる原野に放牧するがい—ことはなにか<sup>33)</sup>。

児童を自由快活に成長せしむるの方法を示し玉へ<sup>34)</sup>。

いかにせば院児を生々たる児童となすことを得るや。家族的の設備をなして適當なる母を置く可し。人数を十人以下に制限すべし<sup>35)</sup>。

石井がその日誌に院児について書き記す場合そのほとんどは理想的人間象——すでに指摘したように「有為の人物」<sup>36)</sup>、「活ける大人物」<sup>37)</sup>、「社会有用の人物」<sup>38)</sup>といった類——であって、現実の孤児のありよう（としてかれが認めたもの）につい

てはそれを見出すことは困難なのだった。現実の孤児のあり方についての記述は、かならずしもかれらの問題性の指摘とならなくともすむはずである。しかし石井は「生気なき」という問題性を示したものとして現実の孤児のあり方を指摘した。何百の子女も自分の「一挙一動によりて或は右し或は左する」であろうという自信は、そうした孤児たちの問題状況に直面して、そのたしかさを失なうに十分ではなかったか。いずれにせよ、ここではさきに抽出した観念としての「東洋孤児院」に焦点を合わせよう。それもまた問題化しているにちがいないのである。とすれば、石井はその問題をどのように認識してゆくだらうか。この点を追究することがここでの課題である。

「生々たる児童」とするために「適当なる母」を置き、また人数も10人以下に「制限」し、あるいは茶臼原に移ってはどうか、と石井は上に指摘していた。それらの案は、里親制度の採用、寮母の役割の強調、家族舎の設立、茶臼原への移転と「農業的独立」による殖民村の建設、といった措置として主に明治40年以降に具体化してゆく<sup>39)</sup>。以下においては、一方にこれらの事柄への石井の関心のあり方を日誌（明治38年次）にたどりながら、上の問題に接近してゆきたい。

i) 「あゝ予は『進撃的の孤児救済法』を実行せよとの御命令に接して復活した。…天下の孤児救済事業は予の天職也、予の生命なり。あゝ予は幸福なるかな。天下の孤児を悉く岡山に集め、之れに普通教育を施し、終ひに之れを韓清米の三殖民地に送るべし」（明治38、2、24）。このような拡張化の考え方はさらにすすむ。「孤児大救済の決心をなしてより、予の心は宇宙と一体となり空間と時間と一致せし自覚を得て感喜に堪へず」（3、4）。ここにいたって「東洋孤児院」の規模についての感覚はほとんど極限に達している。しかし、こうした拡張化の考え方とは異なった所見が示される。「まづ塾舎を改築し内部の組織を改め、漸次理想に向って進む可し。まづ現在三百人の大家族を理想的に整理し理想的に教育することを力めよ。之れ即ち天下の孤児を救ふ所以なり。浮かるゝななれ浮かるゝななれ決して戦争熱に浮かさるななれ」（4、20）。「内部」への認識がここに示されている。それは抽象的な「内部」ではなく、塾舎の政策にかかわる具体的な事柄である。しかもそのことは、「天下の孤児を救ふ」という本質に通ずる

と理解されている。こうした方向は一時的なものとして把握されるのではない。「今日は内容充実——内部改良の時代にして決して千人説空称の時代にあらず」（4、26）。このように重要なものとして自覚された「内部改良」とは、具体的に何をどうすることか。塾舎にかかわる記述をみてゆこう。「大勢を一室に住居せしむるは、児童をして相互的に圧迫せしむる所以なり」（8、8）。「十人を容るる家族的塾舎を増築せよ」（8、9）。内部改良とは「圧迫」された児童の問題についての認識に基づいている。「外部に向って膨張せずして内部を充実せよ。之れ今日の急務にあらずや」（10、12）。内部改良とは、また、「膨張」策との緊張において選択される。そうした改良の方向はさらに具体化してゆく。「来年より一人前の衣食費を金三円五十銭として衣食住一切のことを全く塾母に委任すべし。二、一家族を五人づつすることは理想的なり」（12、7）。このように児童が生活する基本的な場のあり方を塾母を主とする「家族主義」（12、7）の方向へと石井は転換しようとする。

ii) 「唯全心力を集中して理想的の生命ある感化力ある活ける孤児院となし、理想的の人物を輩出することを力めよ。三、之れあに爾（石井自身を指す——引用者注）が天地に対する責任にあらずや」（明治38、4、14）。「理想的の人物」という言葉は上の記述のなかでは無内容といっている。かれの念頭にあるその「人物」とは、これまで期待していたような社会において有為な人材を指しているのだろうか。この点については明確ではない。けれども、そうした人材が輩出してくれることを期待していた高揚感はこの時点でも示されているかもしれない。その2カ月後、次のような対照的な記述がなされる。「土百姓に適する人間のみ日向（宮崎県の茶臼原——引用者注）の農林部に送りて暫らく農業教育を施し、高鍋穂北の農家に奉公せしめ、終に茶臼原或は他の村々に土着せしむ可し」（6、27）。「理想的の人物」が輩出してくれることへの期待とは異なって、ここでははるかに現実的な指針が示されている。その翌日には次のような記述がみられる。「（一）岡山孤児院をして今一層国家有用の事業となすべし。（二）其の方法として遠洋漁業隊を編制す可し」（6、29）。「国家有用」という言葉を石井はかつては孤児たちが実現すべき「理想的の人物」の特徴として強調していたのだったが、ここでは現実の岡山孤児院の事業に対

してついている。こうした現実的な態度に基づいてかれは次のように記す「岡山孤児院は『工業的孤児教育院』なり。而して茶臼原には『農業的孤児院』を設立せよ」(8. 26)。「岡山孤児院の理想的人物 一、誠実勤勉なる活版職工 二、誠実勤勉なる農夫。決して未熟な西瓜を市場にいだす可らず」(9. 2)。「職工」「農夫」といった現実的な人間のあり方が「理想」として明記されている。こうした理想にもかれは十分に意味づける。すなわち、かれはこう記す。「あゝ予は早晚茶臼原に『イルホルド』部落を建設し、理想的の『エミール』及び『ソフヒー』の教育場となさん」(9. 8)。「二宮尊徳翁と『フランクリン』とを吾党の理想的人物とし児童の脳裏に印象を与ゆべし」(10. 31)。「誠実勤勉」なる農夫、職工を養成しようとすることは、歴史上、小説のなかの著名な人物の教育にも類比されるものであると、石井は意味づけていた。

iii)「中心点に鎮坐して内外の院役者を指揮監督して天命を遂行するは、予の天地に対する職分なり」(明治38. 3. 9)とある。だが、その数日後にはこう記されている。「自らの母親の無限なる愛心をもて衆児を暖育せざる可らず…之れにあらざれば決して人の子を育つこと能はず」(3. 11)。前者は東洋孤児院を特色づける院長の位置についての記述だが、後者ではそれを疑問に付すとも考えられる所見を示している。母親の「愛心」を期待するのと同じ内容の記述は以後にも見出せる。「孤児院事業はどこまでも婦人本位でやらねばいかぬ」(3. 29)。「教育ある親切なる保母を聘せざる可らず。之れ今日の最大の急務なり。この理想的の婦人役者を得るために、全国教会或は基督教主義の女学校を巡回すべし」(4. 11)。院役者とりわけ「婦人」「保母」がなぜ必要とされるかについて、かれはとくに日誌に明らかにしてはいない。保母たちの「愛心」を切望するような孤児の心性のありようについて、なにほどかの理解があったのだろうが、そのことを直接、具体的に明らかにする記述はみられない。いずれにせよ保母たちの役割を強調することは、「不動尊」としての自己の位置を問題にせざるをえないのではないか。「温和誠実の婦人役者を与へ、理想的の孤児院を建設せしむ玉へ。予は即ち孤児院の監督者なり。茲に鎮坐して托せられたる群羊を牧養せざる可らず」(4. 13)。「婦人役者」に対する期待、そして

「監督者」としての自己認識、それらがここでは並存している。「予」とはもはや東洋孤児院の「不動尊」としての中樞の立場を失なっているのだろうか。「各部に一人の理想的母親を置き、他は出身の女子をして補助者として働かしむ可し」(4. 15)。このような院役者についての記述にあっては、「不動尊」としての立場は意識の背景にしりぞいている。「(理想的保母につきて) 求めよ、さらば与へられ、尋ねよ、さらばあい叩けよ、さらば開らるゝことを得ん…と然り、予は熱心に神前にひざまづきて理想的の保母を求め、且つ進んで諸国を巡歴して之れをさがし求めん」(4. 25)。保母たちに対するかれの期待感是这样して強度を増してゆく。以後においても、「適当なる母」(8. 7)、「健康にして柔和なる保母」(8. 9)、「適当なる婦人院役者」(11. 27)、「適当なる孤児の母たる姉妹」(11. 30)といったスタッフを石井は待望している。

明治43年(1910)の日誌に「評議員会を開らき、岡山孤児院を『東洋孤児院』と改称し…事務所を大阪出入橋に移転す可し」(7. 22)とある。「東洋孤児院」という言葉はここでは実務上の文脈のなかで使われている。その改称の話題がどのようなねらいにあるのか、その時点の日誌をみるかぎりでは不明である。しかしたしかなことは、「東洋孤児院」の観念をこの頃(40年代以降)の日誌に検出することできないことである。上にみたように、すでに明治38年のうちに漸次この観念は解体が進行していたのであった。なるほど、翌39年の「無制限内容」の措置をこの観念は思想的に基礎づけるものであった。だがしかし、もはやその年にこの当の観念は石井の内部に見出せぬものであったことに、注意されねばならない。在院児の総数が、明治38年12月現在で365名、その翌年に大量の孤児を次々に収容して6月に1200名にも達したということ。こうした外的衝撃によって「東洋孤児院」の観念が解体したというのではなかった。外的衝撃ではなく、まさにこの「東洋孤児院」という観念それ自体のうちに、救済や教育にかかわるなんらかの問題が内包していたにちがいない。この点を次に究明してゆこう。

#### 注

- 1) 本稿でいう「思想」とは、感覚、観念、認識、考え方などを包括する概念とする。

- 2) 日向国(宮崎県)に生まれた。明治17年(1884)岡山キリスト教会で洗礼をうけた。20年岡上に孤児院を設立した。「近代日本における社会事業の草分けであり、ことに、孤児の救済と教育に重要な開拓的働きをした」と評される。武田清子(1975): 解題, 明治文学全集, 第88巻, 筑摩書房。
- 3) 柴田(1985): 社会福祉の史的発展——その思想を中心として——, 光生館, 158頁。
- 4) 石井と留岡とは同時代に生き、当時の用語でいう「慈善家」であるが、その施設で対象とした者については前者が「孤児」で後者が「不良少年」である。この相違点は、本稿(とくに下)で両者の思想を比較、検討する上で本質的な支障とはならないであろう。
- 5) この方面の研究については、柴田(1978): 石井十次の生涯と思想, 春秋社, 148—156頁, を参照のこと。「無制限収容」の考えはすでに明治22年(1889)の日記に示されていること、パーナード孤児院の門に表示された No Destitute Child Ever Refused Admission という考え方に示唆されたのではないかということ、皇室の御下賜金授与を機会にこの措置を宣言したこと、東北凶作地の孤貧児救済の活動としてこの措置が実施されていったこと、などが明らかされている。
- 6) 岡山孤児院新報, 第122号。
- 7) 明治15年(1882)より大正2年(1913)までの日記が、石井十次日記, というタイトルで石井記念友愛社より刊行(1956—1983)されている。本稿もそれに拠る。以下、日記と略記する。また年月日のみを記す。
- 8) 明31. 明治文学全集, 第88巻, 筑摩書房, に所収。
- 9) 柴田氏によれば、「彼の孤児院事業が一応成功して、社会も彼を高く評価するにいたった、いわば得意の時期」(石井十次の生涯と思想, 19頁)だが、「無制限収容」の措置とそれを可能にする思想がまとまったかたちでみられる時期という意味で30年代の日記を重視したい。
- 10) 明32. 1. 16.
- 11) 明33. 7. 18.
- 12) 明37. 7. 16.
- 13) 明34. 1. 10.
- 14) 石井の日記には傍点、圏点を付した記述が多い。本稿での引用文のかなりの部分もそれらが付してある。傍点などを付して強調してゆく——たとえば「進撃」や「東洋孤児院」という言葉、それらの関連語について強調してゆく——ことは、かれの「進撃」の感覚を表現している場合が少なくないのであろう。しかし本稿の以下の引用文では、石井によって付された傍点、圏点を論述の便宜上からいっさい省略した。本稿で付されている傍点は、とくに断わりがないかぎり本稿筆者によるものである。
- 15) 明38. 2. 4.
- 16) その用例を以下列記する。明30. 8. 16, 明30. 8. 25, 明31. 5. 7, 明31. 10. 6, 明31. 10. 29, 明31. 11. 24, 明31. 11. 30, 明37. 4. 11, 明39. 10. 12など。
- 17) 明30. 8. 16.
- 18) 明31. 3. 10.
- 19) 明31. 11. 24.
- 20) 明32. 12. 11.
- 21) 明32. 7. 17.
- 22) 明37. 12. 15.
- 23) 明32. 1. 1.
- 24) 岡山孤児院日記, 明32. 4. 3.
- 25) 日記, 明36. 10. 26.
- 26) 明36. 1. 27.
- 27) 明36. 5. 4.
- 28) ただし、より現実的な岡山孤児院が意識される時、「院内の組織を定め各部責任的に事業を分担せざるを可らず」という考えはあった。明33. 3. 27.
- 29) 名称、目的、維持法、教育、役員、報告、などの事項からなる綱領が日記にみられる。明31. 10. 29.
- 30) 明32. 8. 15.
- 31) 明32. 8. 16.
- 32) 岡山孤児院新報, 第43号, 明33.
- 33) 明38. 7. 30.
- 34) 明38. 8. 3.
- 35) 明38. 8. 7.
- 36) 明27. 11. 27.
- 37) 明28. 4. 23.
- 38) 明32. 4. 5.
- 39) 柴田, 石井十次の生涯と思想, を参照のこと。

## Summary

### A Study on Ishii Juji's Thought in the Thirties of Meiji (1897-1906) -With Special Reference to His Ideas on Abolishing Number Restrictions in Orphanage-

Kunio Kawahara      Motoo Ishibe

Ishii Juji (1865-1914), the superintendent of Okayama Orphanage, declared in 1905 to abolish restrictions on number of orphans admitted. He realized his Plan the next year and admitted 1200 orphans to the institution.

This paper aims to clarify Ishii's thought which led him to remove these restrictions. In particular, his thinking which was influenced by his perceptions on everyday-life, and his reservations about abolishing the restrictions are examined.

A careful analysis of Ishii's diaries reveals the notion of "Toyo Orphanage". Its main features are expansionism, the training of talented youth and the pervasive authority of the superintendent. Okayama Orphanage was rearranged accordingly.

Through the "Toyo Orphanage", Ishii, failed to make any distinction between relief (ie. accommodation) and education, and did not necessarily take each orphan's needs into consideration.

**Key word:** pitiful orphans, Toyo Orphanage, unrestricted accommodation, relief and education